【研究ノート】

チャイコフスキーと聾唖の少年

高　橋　和　夫

要旨

帝政ロシア時代を代表する作曲家チャイコフスキーは名曲を数多く残している一方、同性愛、虚構の結婚生活、自殺未遂など波乱に満ちた生涯を送っている。その中で聾唖の少年コーリャと交流があった事実はあまり知られていない。チャイコフスキーという世界的な音楽家が、聾唖の少年コーリャと何故出会い、触れあいが生まれたのか、一見奇跡のような不思議な交流を、残された写真や手紙などで史料考証を行いその過程を追うことで、コーリャ少年の辿った運命を可視化することを試みるものである。

キーワード：チャイコフスキー、聾唖、コーリャ、モデースト

1. 作曲家チャイコフスキー

1. 1. チャイコフスキーの人間性形成

図1

冒頭の写真（図１）[1]は、1878年1月16日イタリアの北部サンレモにて撮られた写真である。前列右からチャイコフスキー、中央が彼の10歳年下の弟モデースト、そして一番左端の子供が本稿の重要な主題である聾唖の少年、愛称で呼ぶことにしよう、コーリャである。後方、横を向いているのは召使いアレクセイである。

この写真は本稿のテーマを象徴する写真なのであえて冒頭に取り上げた。おそらく彼らのつながりの形の最もよく現れた写真になると推察される。

また本稿を展開するに当たり、固有名詞の表示を整理したい。文献によっては『チャイコーフスキイ』、『チャイコフスキー』など記述が異なるので、本稿では引用元も含めて『チャイコフスキー』に統一する。『ニコライ』、『アレクサンドラ』『カーメンカ』も同様である。また『聾唖』の表記は現代表記である『聾唖』に改めた。

チャイコフスキーとコーリャが初めて出会った時期は後述するがおそらく1876年７月と推察される。（図１）の写真は初めて会ってから一年半後のことになる。

その時期、チャイコフスキーは音楽家、作曲家としてすでに揺るぎない名声を確立していた。そんな彼が聾唖の少年コーリャと何故つながりを持つに至ったか、一見意外な組み合わせに見えるこの出会いのいきさつを知るには、彼の人となりがどうやって形成されてきたのか、彼の少年期を知ることが重要であると考える。

またチャイコフスキーの死後1世紀を超える年月を経たこんにち、同じロシアの指揮者がチャイコフスキーを偲んでコメントした言葉も含蓄に富むのでここに記したい。チャイコフスキーを扱ったドキュメンタリー番組（BBC,1977）が制作されたときのことである。現代のロシアの指揮者ユーリー・テミルカーノフが次のように発言している。

> 「ベートーヴェンは個人とは対話しません。話し相手は人類です。しかしチャイコフスキーは人類とは話さない。世界を変える気はありませんからね。その代わり、ひとりひとりの人間と話し合おうとするのです」（宮澤2006：２）

このコメントからチャイコフスキーの人品や世界観が窺われるのではないだろうか。名もなきひとりひとりと話し合おうとするこの姿勢からチャイコフスキーと聾唖の少年コーリャの交流が生まれたことは想像に難くない。

作曲家ピョートル・イリイーチ・チャイコフスキーは1840年４月25日にウラル地方の鉱山の町ヴォトキンスクで生まれた。当時のロシアでは暦が西欧と異なっていて、12日の差があり、ロシアの暦に12日を足せば西欧の暦と一致することになる。したがってチャイコフスキーの誕生日は現代風に言えば５月７日ということになる。

1　http：//en.tchaikovsky-research.net/pages/File：Photo034.gif　2016年６月１日閲覧

父親はイリヤー・ペトローヴィチ（1795～1880）。鉱山で政府の監督官を務め,音楽と演劇が趣味であった。母親は18歳年下の後妻のアレクサーンドラ・アンドレーエヴナ・アッシェール（1813～54）。ドイツ語とフランス語に堪能で、ピアノも得意な歌手であった。貧しい出でありながら教養を身につけた女性である。

父親イリヤーは再婚で、先妻マリーヤとは1827年結婚し1831年死別、ジナイーダという娘がいる。その後、1833年にアレクサンドラと結婚して、兄にあたる長男ニコライリヤー・ペトローヴィチ（1838～1910）が生まれており、ピョートル・チャイコフスキー（1840～1893）は次男となる。後に次女アレクサンドラ（1842～91）、三男イッポリート（1843～1927）、そして双子の兄弟モデースト（1850～1916）とアナトーリイ（1850～1915）が生まれている。なお長女エカテリーナは長男より先に生まれたがすぐ亡くなっている（森田1993）。

チャイコフスキーの家族のなかでは妹アレクサンドラ、双子の弟の一人モデーストとは後に深いつながりが生まれ、チャイコフスキーの人生に多大な影響を与えている。

図２　チャイコフスキー一家

図３　拡大図

チャイコフスキーの幼少時代の写真がある。（図２）[2]がそれである。チャイコフスキーは一番左端に立っている。1844年。４歳。座っている父と母の間に立っている子供は左から姉ジナイーダ、兄ニコライ。父親に寄りかかっているのは弟イッポリート。母親に凭れているのは妹のアレクサンドラ。双子の弟、モデーストとアナトーリ

2　http：//jp.reuters.com/article/l4n0h04et-tchaikovsky-putin-idJPTYE98401120130905　2016年６月１日閲覧

イはまだ生まれていない。図３の拡大図では髪が立っているのがわかる。チャイコフスキーは、身だしなみのいい兄ニコライとは好対照だったという。だが人を引き付ける魅力があったという。（サハロワ・岩田1991）

チャイコフスキーは幼年時代、ヴォトキンスクで生まれ育っている。４歳半の時兄たちのために用意された家庭教師ファンニ・デュルバッハに僕にも教えてと泣きながらせがんだ。そして兄たちと同じ条件での課題を要求して、それらをこなすことができ、みんなと同じ勉強ができるようになった。６歳でフランス語とドイツ語を身につけ、７，８歳でフランス語の詩を書いている。（森田2013）周りの大人たちが利発なチャイコフスキーに特別な態度をとらないように腐心する文章がある。

> （前略）すべての子供に対するのと同じ態度で彼に接していた。しかも心の奥で彼が他の子たちよりも優れていると意識していることを感じさせないように。（サハロワ・岩田1991：179）彼とはチャイコフスキーのことである。

音楽を始めるきっかけについても触れよう。演劇好きの父親が持っていた自動オルガン、オーケストリーナは非常によい音がし、その中でモーツァルトの曲目はチャイコフスキーを魅了した。５歳でオーケストリーナから聴いた音をピアノで拾えた。あまりにもピアノに熱中するので、ピアノを禁止されると彼手当たり次第にものを指でたたき続けるほどだった（サハロワ・岩田1991,森田1993）。

またチャイコフスキーは音楽の才能だけでなく、優しい心の持ち主でそれを物語るエピソードには事欠かない。次にあげるものもその一つである。

> チャイコフスキーの感受性はあらゆる弱いもの、哀れなものに向けられている。彼には孤児や母の愛、哀れな動植物などに対する特別の感受性があった。彼はこのような正義感を例証する次のようなエピソードをファンニが伝えている。
>
> 後に彼らの授業に加わったヴェネディークトという少年がいた。彼は工場の勤め人の子供であったが母親が死んでいなかった。ある時、子供たちが取っ組み合いの喧嘩をして、言うことを聞かなかったので、ファンニがこの少年に「ヴェーニチカ、言うことを聞かなかった罰として、御者の所へ行って、馬を付けてもらって、家へ連れて帰ってもらいなさい」といった時、すかさずピョートルが立ち上がって、「ファンニ先生、あなたはヴェーニチカにお母さんがいないことを忘れています。あなたは母親代わりなのですから、孤児を追い出す権利はないはずです」といった。「つまり、ピエール、私の生徒が言うことを聞かなくても、私には罰を与える権利がないというのですか」と、ファンニが反論すると、「私たちに対するのと同じ罰を与えて下さい。特別なものを思いつかないで下さい」と抗議したという。ヴェネディークトもニコライもただ謝るだけだったのに、ピョートルかこのような整然とした主張があったことに、ファンニは深く心を動かされたのである。
> （森田1993：25～26）

文中の『ピエール』、『ピョートル』はチャイコフスキーの愛称である。後に引用する『ペーチャ』も同様である。チャイコフスキーのこの主張は実に子供離れしている。チャイコフスキーは後に聾唖の少年コーリャと知り合い、深い愛情を注ぐことになるのだが、不遇な人を思いやる心情の萌芽がその時すでに見られている。だが優しさは時には繊細な感受性と背中合わせであることが多く、それは傷つきやすいことを意味している。ファンニは後にチャイコフスキーの少年時代の、ガラスのような繊細な面をつぎのように回想し、モデーストがそれを記録し伝記にしている。

> ペーチャはとても神経質でしたから、まるではれものにでもさわるようにしていました。ほかの子どもならたいして響かないような小言でも、ペーチャにはひどく響いたようです。（志島1993：32）
>
> 人々が彼を愛したのは，彼自身がすべての人を愛していたからでした。あまりにも感じやすい子供、皆は彼をとても注意深く取り扱わなければなりませんでした。（後略）（ヘルム・許1993：24）

彼は優しく感受性が強い故に子供の時からいろいろ傷つく試練をいくつも経験している。

1848年父親イリヤーが工場長を退任することになり、一家は11年間住み慣れたヴォトキンスクを離れ、モスクワに移ることになる。チャイコフスキーは大好きだった家庭教師ファンニと離れることになり、環境の急激な変化に巻き込まれる。チャイコフスキー８歳の時である。（文中『ファニー』は『ファンニ』のこと）

> 「彼女との別離がピョートルに最初の神経的障害をひきおこした。このような鬱状態はその後、生涯全体にわたって彼を悩ませ，ようやくずっと後になって，いくらか克服、隠蔽するのが可能になったのである。ファニーとの別れの結果、ピョートルはしばしば鬱状態となって、泣きじゃくったり，心理的に苦しんだりした。」（ヘルム・許1993：24）

モスクワでは別の家庭教師になったが相性が悪かったようで、また一家の養育係がコレラにかかったこともあり彼らはペテルブルグに移る。そこはロシアの帝都であり母親の故郷でもあった。チャイコフスキーは兄ニコライとともに寄宿学校に入れられ、またしても生活が一変する。学期途中からの転入のため勉強に追われ、特にチャイコフスキーは音楽の勉強もはじめたので、負担が大きくなった。そして、12月に麻疹になり、兄は回復したがチャイコフスキーは回復が遅れた。

> 「その時の彼にとっては考えられる中でもおそらくもっと適切でない決定だったが、当時、心理療法、児童心理学はまだ知られていなかったのである。」（ヘルム・許、1993：26）

1849年父親イリヤーがアラパーエフスクとネビヤンスクの２つの工場の工場長になり、広い家に住むことができた。兄ニコライは寄宿学校に入り、チャイコフスキーはアラパーエスフクで生活する子供たちの中では最年長になったが、同年代の遊び相手がいないさみしい生活となった。その中でピアノはうまくなり、リーディア（年上のいとこ）が家庭教師ファンニに宛てた手紙の中で

「…ときどきペーチャの音楽に合わせて、自分たちで踊ったり、歌ったりします。彼はとても上手に弾くようになって、大人かと思うくらいです。彼の現在の演奏は、ヴォトキンスクの頃の演奏とは比較になりません」（全集5-11）（森田1993：30）。

だが、同じく母の手紙では

「ピエールはすっかり人が変わってしまって、怠け者になりまったく勉強しませんし、しばしば私を涙が出るほど悲しませます」（モデースト１-51）（森田1993：30）。

文末の（全集５-11）（モデースト１-51）は（森田1993）に限って森田の引用である。以下同様である。チャイコフスキーは音楽に関わるときは大人顔負けの演奏をするのに、実生活では怠け者という両極端な性格が読み取れる。両親はチャイコフスキーを法律学校入学に備えて準備コース（２年）へ入れるため1849年暮れに家庭教師をつけ勉強させる。また、1850年５月に双子の男子が生まれる。そして８月にチャイコフスキーを法律学校に入れるためペテルブルグへ出発した。チャイコフスキーはまだ10歳になったばかりである。親との別れの様子が克明に次のように記録されている。

「別れの場所に来ると、彼は母から離れることができなかった。どんなに慰めても、なだめても、すぐにまた会えるからと言っても、無駄であった。彼は何も聞かず、何も見えず、愛慕する存在と溶け合ってしまったかのようであった。力ずくで哀れな子をアレクサンドラから引き離さねばならなかった。彼は離れるのをいやがって、所かまわずにしがみついた。とうとううまくいって、彼女は娘たちと馬車に乗った。馬が動き出すと、子供は最後の力を振り絞ってケーイゼルの手を振りほどき、絶望的な叫び声を上げて、馬車のあとを追いかけ、なんとかそれを引き留めようとして、車の踏み段や、泥除けや、触られるものなら何にでもしがみつこうとした…」（モデースト１-61）（森田1993：33）。

寄宿舎に入れられて母と別れるこの辛さは少年の心に深い傷を負ったことは想像に難くない。ヴォトキンスクで過ごした８年にわたる家族に囲まれた幸福な子供時代は終わりを告げる。

1851年になると父イリヤーがペテルブルグに戻り一家で暮らす準備を始める。校長の配慮でチャイコフスキーを寄宿学校から引き取ってしばらく一緒に住むことになっ

た。1852年チャイコフスキー一家がアラパーエスフクからペテルブルグに到着、家族と一緒の生活が戻ってきた。チャイコフスキーは法律学校で正規の学業を開始し、幸せな時期となった。しかしそれは長く続かなかった。1854年６月13日、最愛の母アレクサンドラがコレラで急死するのである。チャイコフスキー14歳、多感な年頃である。

チャイコフスキーは家庭教師との別れ、親元は離れての寄宿舎生活、病気、母の死、他にもいろいろな試練を受け傷つき心が癒えないまま大人になり、彼の音楽に深い影響を与えたことはどの研究家も指摘している。が、それだけではない。同性愛もまた彼の人生に影響を与えている。

1.2　同性愛

チャイコフスキーが生まれた時の帝政ロシアは現在ロシア連邦になっている。チャイコフスキーにとっては皮肉とも言える、同性愛宣言禁止法がある。世界的な報道機関であるロイターはプーチン大統領がチャイコフスキーの同性愛についてのコメントを記事にしている。2013年９月４日。以下に引用する。

> ［モスクワ　４日　ロイター］- ロシアのプーチン大統領は４日に放送されたテレビ番組のインタビューで、同性愛者だった作曲家チャイコフスキーを国民が誇りに思っていることは、ロシアが同性愛者を差別しないことの証明だと発言した。
>
> 今回の発言は、同性愛規制法に対する批判を和らげる狙いがあるとみられる。この法律は未成年者の前で同性愛を宣伝する行為を禁じるもの。
>
> プーチン大統領は番組内で、「チャイコフスキーは同性愛者だったが、彼は偉大な音楽家であり、われわれは彼の音楽を愛している」と指摘。その上で「ささいなことに大騒ぎする理由はない。この国で恐ろしいことなど起きていない」と述べた。
>
> 同性愛規制法をめぐっては、ロシア国外からの抗議の声が上がり、同性愛者の権利保護団体は、来年のソチ五輪をボイコットするよう呼びかけている。[3]

チャイコフスキーの同性愛は周知の事実だが、ロシア側の資料ではまだ伏せられていることが多い。しかし、チャイコフスキーを研究する人々によって少しずつ解明が進んできている。列挙してみよう。

> チャイコフスキーは同性愛者であった。これは今や定説であり、ボーイフレンドの面々も特定されている。（宮澤2006：10）

> 「（前略）わたしは、自分の幸福のための、一番大きな、そして克服することのできないほどの障害になっているのが、私の例の傾向であることがわかったのだ。わたしは、全力

3　http://jp.reuters.com/article/l4n0h04et-tchaikovsky-putin-idJPTYE98401120130905　2016年６月１日閲覧

をあげて自分の性向と戦わなくてはならない･･･」（中略）この文中の「例の傾向」とか「自分の性向」というのは明らかに自分が同性愛であることを指しているわけだ。（志島1993：99）

また同性愛がいつ露見するかという恐怖感が彼の性格を陰鬱にしたという説もある。

彼の精神的な不安定、神経質の本質的な原因は、性的な衝動を苦心して抑圧していたせいである。すなわちチャイコフスキーは他の人間たちと同じように恋しようと無駄な試みをしたり、意地悪で無慈悲な社会が彼の秘密の一面、本来の性的な傾向を発見するかもしれないという絶え間ない不安にさいなまれていた。（ヘルム・許1993 p54）

チャイコフスキーは少年時代に経験した試練による心の傷の他に,同性愛という宿命まで抱えて、苦悩しながら生きてきたのであろう。当時の世界はどのように彼を見ていたのだろうか。興味深い記述をいくつか紹介する。

一八七八年、『新時代』誌に、音楽院の先生たちを非難する記事が載り、その最後にこの匿名氏が、「哀れな女子学生を困難な状況に追い込む音楽教師の情事」について指摘した後で、「音楽院には別種の情事もあるが、それについては、容易に理解できる事情によって、いっさい語ることを慎みたい」と締めくくったとき、この記事を読んだチャイコフスキーは即座にモデーストに手紙を書いた。「この暗示の内容は明白だ。ダモクレスの剣は、私が最も恐れている新聞でのほのめかしという形をとって再び私の首に突きつけられた。確かに今度のほのめかしは私個人に向けられたものではない。しかしその方がもっと悪い。私の噂が音楽院全体への非難になり、そのために私の恥と苦痛はいっそうひどくなる」（1872.８.29モデースト）。ポズナーンスキイはこの時代のロシアでも、ヨーロッパでも、同性愛に対して社会的寛容さがあったことを強調しているが、このような記事の内容も、彼の立場を補強する一例といえるだろう。しかしチャイコフスキーにとっては辛い記事であったことに変わりはない。（森田1993：127）

また新聞記事になったこともあり、その新聞記事の内容はわからないが,支援者であるメック夫人に対しての手紙では悲壮な心情を吐露している。

「（前略）まさに斧で頭を殴られたような気分でした！　私は公開されること、特に新聞に書かれることに対して、最大のそして乗り越え難い嫌悪を抱いている人間です。私にとって、人々の関心の的になることよりも恐ろしく、嫌なことはありません（後略）」このように常に不安にさいなまれる心理状態が、チャイコフスキーの創作そのものと深い関わりを持っていると考えるのは根拠のあることだろう。彼は非常に豊かな人間関係を展開し、

あらゆる人々に愛され、多くの人々と親密な係わりを持ったにもかかわらず、彼の人嫌いはいっそう助長されて行ったのである。（1878.9.4.メック）（森田1993：127）

チャイコフスキーは少年時代の心の傷の他に同性愛という宿命を抱えながらいくつもの名曲を作曲している。その陰に聾唖の少年コーリャに優しいまなざしを向け交流を持ったことはあまり知られていない。希薄でお座なりな関係ではなかったことは確かである。これを次の章で述べたいと思う。

2．聾唖の少年コーリャ

2.1　出会い

チャイコフスキーが交流した聾唖の少年は写真、名前、ほんの少しの家庭事情などの記録が残っている。少年の名前はコーリャ・コンラーディ（1868～1922）。[4]父は農場主の、ハーマン・コンラーディ。[5]（1833～1882）。　コーリャのために家庭教師を雇えるくらいだから裕福であったろう。母はアリーナ・イヴァノヴナ・マイヤー（1849～1932）。[6]

1876年モデーストがコーリャの家庭教師となる。1881年コーリャ（コンラーディの愛称）の両親が離婚、1882年コーリャが14歳の時父が死別し、チャイコフスキーの弟、モデーストが後見人となる。[7]

作曲家チャイコフスキーが、音楽を楽しむための重要な聴覚器官に障害を持つ聾唖の少年と交流が生まれることは想像しにくい。そもそも世界が違う二人がどのように出会ったのだろうか。それは双子の弟のひとりモデーストの存在が大きい。そのきっかけを引用する。

「モデーストはキエフの田舎での仕事が嫌で、ペテルブルグかモスクワかに仕事を探していたが、同じ十二月に、ニコラーイ・コンラーディという八歳の聾唖の子供の教育係を引き受けることにした。その条件として彼は、フランスのリヨンにある有名な専門家の学校で、一年間研修を受けなければならなかった。モデーストがこの仕事を引き受けることを強く勧めていたチャイコフスキーも、パリまで一緒に行くことになった。十二月末に彼らは連れだって、機嫌よくヨーロッパ旅行へと出発した。」（森田 1993：162）

ロシア暦で1875年12月20日以後のことである。１月８日、パリでモデーストとともにオペラ・コミークで『カルメン』をみたとある（森田1993）ので、その後モデース

4　http://en.tchaikovsky-research.net/pages/Nikolay_Konradi　2016年６月１日閲覧
5　http://en.tchaikovsky-research.net/pages/Herman_Konradi　2016年６月１日閲覧
6　http://en.tchaikovsky-research.net/pages/Alina_Bryullova　2016年６月１日閲覧
7　http://en.tchaikovsky-research.net/pages/Nikolay_Konradi　2016年６月１日閲覧

トはリヨンに行ったと思われる。リヨンでの専門学校については

「リヨンで聾唖者のための学校を開いていたグゲントブレルという専門家の所に勉強しに行く途中であった。」（森田1993：165）

モデーストが学び、コーリャ少年に実践したのは“sonic speech”といわれるものでまた、３カ国語勉強したとある。[8]

1876年７月にチャイコフスキーがウィーンを出てリヨンに行ってモデーストに会い、ここで三日を過ごしてからヴィジに着いて温泉療養に入ったこの時期の出来事をモデーストと双子の兄弟であるアナトーリイに報告している手紙がある。その手紙の中にコーリャに関する部分があり、次の通り抜粋する。

「モデーストと彼の家族に会ったことがどれ程嬉しかったか、お前に説明できないほどです。僕は夕方、彼らがちょうどコーリャを寝かせるところに、不意に到着しました。（コーリャは最初の瞬間から僕を完全に、そして永遠に魅了しました。それから僕とモデーストはカフェに行って、夜の十二時までおしゃべりをしました。それから二日半の間、朝八時半にモデーストとコーリャがグゲントブレルへ行く途中に、僕の所に立ち寄り、僕は十二時まで一人で過ごし、残りは皆と一緒に過ごしました。僕のコーリャに対する愛情は、第一に彼のすばらしい柔和な気質と知力に、そして第二に彼に対する深い同情に基づくもので、一分ごとに等比級数的な速さで増大していきました。そして今では彼は私にとって世界で一番心に近い存在の一つです）」このようなコーリャに対する激しい愛情表現が、ソ連の検閲にかかって削除されているのである。（森田1993：172）

弟モデーストが聾唖の子の教育を引き受け、チャイコフスキーが会いに行き、または訪問を受ける様子が記されている。「最初の瞬間から」というくだり、チャイコフスキーが初めてコーリャに会ったことを窺わせる描写である。

ヴィジで温泉療養を済ましたチャイコフスキーは弟たちの待つリヨンへむかう。以下引用する。

リヨンではモデースト、聾唖の子供コーリャ・コンラーディ、そしてその家庭教師のソフィーヤ・エルショーヴァ［フォーファ］が待っていて、すぐに一緒に夏休みの旅行に出かけた。ローヌ川を船で下ってアヴィニヨンまで行き、そこから汽車でモンペリエに出た。地中海岸のリゾート地パラヴォスが目的地であった。しかしここでは四人全員が水に当たってお腹を壊し、ひどい結果になった。「僕はこの呪うべき村の猛暑も、緑がないこ

8　http://en.tchaikovsky-research.net/pages/Nik　olay_Konradi 2016年６月１日閲覧

とも、全体としてわびしい風景も許せる。でもどうしても許せないのはフォーファをはじめとして、われわれ全員を、朝から晩までひっきりなしに、(･･･［トイレに走ることを］･･･)」強いたことだ。［･･･］もしコーリャがいつも健康であったのなら全て忘れることもできるが、可愛いあの子も［ひどかった］。モーディア、この神様のような子の手に、足に、とくに奇跡のような眼にキスしてやってくれ！僕が彼をどれ程愛慕しているか,お前は知らない。一瞬たりとも、彼のことを思わないことはない」(76・8・19.モデースト）チャイコフスキーはいつも子供を愛しているが、この一節には、明らかに性的なニュアンスがある。全集でここが省略されているのも当然であろう。(後略）(森田1993：173～174)

船や汽車に乗ってリゾート地へ向かう旅の様子と、旅行中に四人全員水に当たった災難、さらにコーリャに対しての過剰な愛の表現も見られる。そしてこの手紙の中でフォーファ、つまりソフィーヤ・エルショーヴァという女性の家庭教師の存在がわかる。(図４）[9]の写真の右端の女性である。中央がコーリャ、左にチャイコフスキー、奥に立っているのがモデーストである。また「全集」とあるのは「書簡全集」のことである。

図４

現存する写真の中ではコーリャ少年最初の写真になる。1876年７月半ばフランスのモンペリエで撮られたものである。計算するとコーリャは８歳前後になる。コーリャの父親はモデーストの他にフォーファも家庭教師に雇えるくらい裕福だったのだろうか。モデーストは発音関係の指導、フォーファは一般の家庭教師、チャイコフスキーは旅行に連れて行くなど金銭的な援助もしていたのかもしれない。さらに微妙な手紙がある。チャイコフスキーがモデースト宛てに同性愛を話題にした手紙の最後にコーリャへの愛を書いている。引用すると長くなるので、文末の部分だけにする。

(前略）(この手紙の最後に僕がコーリャを気が変になるほどめちゃくちゃに愛していると、書かずにいられない。いずれにしてもこの冬にはお前たち二人と会えるに違いない）(76・9・28. モデースト）

9　http://en.tchaikovsky-research.net/pages/File:Photo030.gif　2016年６月１日閲覧

この手紙は特別にカットの多い例であるが、それにしても「全集」と銘打ちながら、それまでに別のところで出版されているものより検閲が厳しいというのもいささか理解しがたい。最初は近親者の、そして後にはソ連当局者の価値観によって、チャイコフスキーの伝説的資料は大幅な改ざんを加えられてきたのである（森田1993：177～178）

2.2　結婚による中断

その後コーリャの写真があらわれるのは１年とんで1878年になる。つまり1877年のチャイコフスキーはコーリャと交流があまりできないくらい運命の激変に見舞われた年であったと思われる。結果を言えば７月にアントニーナ・ミリュコーヴァ（図５）[10]と結婚し、破綻したのである。

図５

チャイコフスキーの結婚は同性愛の評判を打ち消すための偽造結婚という説もある。しかし結婚は誰にも知らせずに行われている。父にさえ初めのうちは知らせていない（志島1993,ヘルム・許1993）。複雑な要因が絡みついていて、諸説が生まれる背景があるのだろう。結婚の動機についてはモデーストが記した非常に暗示めいた表現が次のように残っている。

「家庭生活から生まれるこれらすべての歓喜や苦悩は,彼がこの何年か苦しみ抜いてきた道徳的な悩みから自分の魂を救う妥当な手段と思えるようになった」。（ヘルム・許1993：90）

またチャイコフスキーが結婚を意識したのはこれが初めてではない。1868年モスクワでデビューしたデジレ・アルトーという５歳年上のオペラ歌手と婚約している。彼女の才能に惚れてといった方が近いかもしれないが、いろいろなもつれからアルトーは翌年チャイコフスキーに無断で同じオペラ団の歌手と結婚した（志島1993，森田1993）。チャイコフスキーは驚いたが、もめていたせいもありさほど衝撃を受けず平静を取り戻している。その時から10年、同性愛の噂は様々なプレッシャーとなって

10　http://en.tchaikovsky-research.net/pages/File:Photo032.gif　2016年６月１日閲覧

いたのだろう。少年のとき彼を癒やしてくれた（図１）の家庭は母親がいない今もうない。代わりとなったのがカーメンカのタビドフ家に嫁いだ妹一家（図６）[11]である。写真を見てもわかるようにロシアの上流階級の理知的で愛情あふれる一家である。妹アレクサンドラ（愛称サーシャ）もモデーストもチャイコフスキーの同性愛のことを知っていた（志島1993）。その意味では心の底からから安らげる場所であった。

図６　タビドフ家

彼は妹一家に囲まれているうちに自分を癒やしてくれる家庭を自分で作れるのではないかと思いもしたようだ。そんな折ある女性から手紙を受け取り、交際が始まる。前述のアントニーナである。チャイコフスキーは作曲にしか興味は無かったが、自分が安らげる家庭を、理解がある女性と結婚すれば自分も作れるのではないかとその時幻想を抱いた。

「私は一度も女性を愛したことはないし、熱烈な感情を持つには年を取り過ぎていると思うし、そのような感情は誰に対しても持たないと思う。しかしあなたは私の気に入った最初の女性だ。もしあなたが静かで平穏な愛で満足するのなら,あなたに結婚申し込みす

11　マイケル・ポラード著　五味悦子訳　1998年「チャイコフスキー」偕成社　P59
　中央の夫婦がレフとサーシャ（アレクサンドラの愛称）、右端が娘のアンナ。左端はレフの妹ベーラ。後ろはタチャーナとナターリャという娘たち。前に並んでいるのが息子ドミトリイ、ユーリイ、ウラジーミルの三人。ベーラはチャイコフスキーと淡い恋をし、ウラジーミルはボブと呼ばれチャイコフスキーと親しくなる。

る」（森田1993：190）

「自分としては彼女を愛していないけれども、最良の友人になることから話しはじめ、自の性格、特に感受性の強いこと、気の変わりやすいこと、非社交的であることなどを克明に話し（中略）それでも私の妻になる気があるのかと訊ねました」（志島・1993：94）

まったく消極的なプロポースだがアントニーナは二つ返事で結婚を承諾した。恋は盲目の典型であろう。チャイコフスキーも結婚すれば、思い通りにうまくいくと期待していた節があるが、うまくいかなかった。チャイコフスキーは、発狂寸前になり町をさまよい、川に入って風邪を引いて死のうと試みる。しかし果たせず身も心もぼろぼろになってアナトーリイに結婚生活の後始末とスイスへの療養の助力を受けた。結局アントニーナとは離婚せず、別居してチャイコフスキーは生活費を負担することになる。だが彼女は81年に愛人の子を産むなど不祥事を起こし、精神異常を来し精神病院で亡くなっている（宮澤2006、森田1993）。

またこの年は長年の支援者となるメック夫人との交流も本格的に始まっている。（手紙での交流は前の年1876年12月に始まっている）メック夫人は事業家の夫を亡くし、莫大な遺産を相続している。チャイコフスキーの曲をこよなく愛し、作曲に集中できるように多額の援助をしている。メック夫人が好意を持って恋に発展しかけたこともあったがチャイコフスキーが注意深く警告を発し、元の静かな関係に戻っている。チャイコフスキーの死の３年前謎の援助中止が起こるのだが、ここでは割愛する（森田1993）。

結局1877年はチャイコフスキーとコーリャ少年の交流はなかったのかというとそうではない。記録に残るものでは、年の暮れになる。12月27日にミラノに到着し、モデーストとコーリャを出迎えというものである（森田1993）。コーリャは主にモデーストと行動し、機会があればチャイコフスキーとも会っていたようである。

2.3　その後

次の年1878年、チャイコフスキーとコーリャ少年の写真が３枚撮影されている。（図１）、（図７）[12]、（図８）[13]である。

（図１）の左端のコーリャはモデーストの肩に手を乗せている。右手で抱えているステッキはチャイコフスキーのステッキだろう。他の二人が持っているからわかる。コーリャは目をつぶっているようだ。モデーストの肩に手を乗せているのは信頼だろうか、拠り所を求めているのだろうか。チャイコフスキーの杖を持っているのも親子関係にも似た関係を示唆しているのだろうか。チャイコフスキーは前年の結婚生活の破綻を感じさせない、自信を取り戻したポーズといえよう。これはある意味象徴的な

12　http://en.tchaikovsky-research.net/pages/File:Photo036.gif　2016年６月１日閲覧
13　http://en.tchaikovsky-research.net/pages/File:Photo035.gif　2016年６月１日閲覧

図７　ニース 1878年１月23日

図８　サンレモ　同年１月31日

写真なので冒頭に掲げた。場所は１月16日、サンレモである。地中海に面するイタリア北部の港湾都市である。(図７)はフランスの南部、同じく海沿いの観光都市ニースで、１月23日である。そしてサンレモに戻って、１月31日撮影（図８）ということになる。

この写真が何故撮られたかというと、チャイコフスキーの支援者メック夫人の依頼だったことがわかっている。１月22日ニースで撮った写真が失敗だったので31日取り直したと記録がある（森田1993)。（図１）（図７）の写真もメック夫人の依頼かどうかはわからないがそうだとしても不思議ではない。

また（図４）に見られる家庭教師フォーファは姿が見えない。何らかの事情があって同行しなかったのだろうか。あるいは家庭教師を辞めたのだろうか。

チャイコフスキーは２月にアナトーリイに宛てた手紙の中でもコーリャを愛していると書いている。

> 「(前略）モデーストとコーリャ(僕はこの子を限りなく愛している）が一緒にいるので僕は本当に幸せだ」(1878・２・６／18.アナトーリイ）ここにもカットがあるが、これは単に下品な言葉を使っているからであろう。この手紙は『肉親への手紙』から訳出したが、全集では（　）の中が全てカットされている。全集でのカットはいろいろあるが、何故カットされているのか意味の理解しかねる箇所も多く、これなどはそのよい例である。（森田1993：201）

D・ブラウンは一月一日（新暦十三日）付けのメック夫人への手紙から「私はめちゃくちゃに子供が好きです。コーリャ［ニコライ］は限りなく私を楽しませてくれます。･･･結論として彼は周りの全ての人間に、愛と優しさとを吹き込むために生まれてきた存在です」という部分を引用して、同性愛的なニュアンスを嗅ぎ取っている。実際、同じ日にアナトーリイに書いた手紙には、もっと露骨に「私がどれほどコーリャを愛しているか、言葉では言い表せないほどです。自分の側にこの様な子供を持って、なんて幸せなのだろう。彼を愛撫し、慈しむことは、なんて心地よいのだろう」と述べているし、三日後の手紙には「私は一日毎にますますコーリャが好きになります。･･･私はこれ以上気持ちのよい性格を持った、これ以上優しく柔和な子供を知りません」と書いているのである。（森田1990：58）

チャイコフスキーのコーリャ少年に対する愛の傾斜は同性愛あるいは少年愛といった意識が根底にあることは否定できない。また憐憫の情が人並み以上のものであったとすればこのエピソードが真実を物語っているのかもしれない。

不幸なものへの愛はまた、ルイ十七世に対する彼の並々ならぬ共感にも現れていた。ファニイの言葉によると、彼は罪なき受難者の痛ましい最期のことを何から何まで事細かに倦むことなく尋ねたということだ。完全に大人になってからも、彼はこの不幸な王子に関心を持ち続け、一八六八年にパリで、タンプル僧院の彼を描いた版画を手に入れ、それを額にいれていた。アントン・ルビンシテインのポートレートと共に、それは彼の部屋の初めての、そして非常に長い唯一の装飾だった。（サハロワ・岩田1991：178）

1881年、チャイコフスキーとコーリャ少年の交流にいくらか翳りが差し込んでくる。引用しよう。

モデーストとコーリャも連れて行きたかったが、モデーストはこのところ両親とずっと難しい関係になっていて、話し合いがつかず、今回は彼らをおいて一人で出かけるしかなかった。（森田1994：53）

“sonic speech”なる指導がうまく行かず両親が不満に思った可能性もある。家庭教師として報酬を払っている以上、成果が見られないならば難しい関係になるだろう。手紙は書けていたようだが、それだけでは満足できなかったのかもしれない。

またその年両親は離婚し、父親が亡くなるのだが、それも有るかもしれない。続いて1883年、

モデーストが予定通りやってきた。コーリャが大きくなってもうモデーストと、一緒に来たがらないことは知っていたが（後略）（森田1994：56）

今度はコーリャ本人もモデーストに距離を置き始める。先年父親を亡くし、思春期もあって精神的に難しい年頃だったろうか。コーリャと、後見人になったモデーストはその後不和になるが、チャイコフスキーとは手紙のやりとりが続いている。

2.4　手紙

ここでチャイコフスキーが出したコーリャ宛ての手紙について触れたい。日本の文献では限界があり、ネット検索で見つけたサイト“Tchaikovsky Research”[14]というところで、現在、1876年７月から1893年６月の間にチャイコフスキーから出された手紙が、合計53通あることがわかる。53通は順不同で485から4948と番号が振られており、文面が公開されているのは以下の通り６通である。その中から重要な部分を選んでみたい。

Letter 485 – 7 /19 July 1876, from Vichy
Letter 646 – 12/24 November 1877, from Venice
Letter 836 – 22 May/3 June 1878, from Brailov
Letter 4372 – 22 April/4 May 1891, from New York
Letter 4549 – 14/26 November 1891, from Maydanovo
Letter 4948 – 3/15 June 1893, from Paris

一番最初の手紙とされる“Letter485”は1876年７月７日。引用先の“Tchaikovsky Research”というサイトではロシア語の原文と共に英語で翻訳されている。以下に引用する。[15]

19／７ July 1876, Vichy

Dear Kolya! Thank you very much for your dear letter [1]. I am very sorry that you were poorly, and am glad that you are well now. I will soon be coming back to Lyons, and then we will all be together at a house in the country—you, Sanya, Modest and I [2].

I am very bored here without you and want to go very quickly to Lyons, so that I can kiss dear Kolya, who I love, hard 1,000,000,000 times. Goodbye, my dear Kolya. If every day you get a + [3], then the Lord will love you, and you shall always be a clever and well behaved boy. I kiss you hard.

Petya

1. Letter from Nikolay Konradi to the composer, 5/17 June 1876.

14　http://en.tchaikovsky-research.net/pages/Nikolay_Konradi 2016年６月１日閲覧
15　http://en.tchaikovsky-research.net/pages/Letter_485　2016年６月１日閲覧

2．Tchaikovsky arrived at Palavas-les-Flots on 27 July/8 August 1876, at the end of a journey by steamship on the river Rhône from Lyons to Montpellier. He was accompanied on his journey by his brother Modest, Nikolay Konradi, and the latter's governess Sofya Yershova ("Sanya").

3．The "+" mark was used by Modest Tchaikovsky when evaluating his pupil's work to signify a positive assessment.

［1］以下［3］まで註がついており、それらも含めて以上の英文翻訳を日本語にしてみた。以下同様である。

1876年７月７日/19日　ヴィジ

親愛なるコーリャ！ あなたの愛しい手紙をありがとう。[1]　あなたの調子がよくなかったことはとても残念です、あなたが元気になって喜ばしい。[2]　私はすぐにリヨンに戻り、そして、君とソフィーヤ、モデーストと私は田舎の家で皆一緒になるよ。

私はここでは君なしで非常に退屈しているよ、愛するコーリャに10億回キスできるよう一刻も早くリヨンへ行きたい。さようなら、私の愛するコーリャ。毎日あなたは+［3］を得たら、主はあなたを愛するだろう。あなたは常に賢く行儀よい少年でなければなりません。あなたに強いキス。

ピョートル

[1]　1876年６月５日／17日コーリャから作曲家への手紙。

[2]　チャイコフスキーは1876年７月27日／８月８日（西暦）、旅の終わりにリヨンからモンペリエまでローヌ川の蒸気船で航行しパラヴァスレフロに到着した。彼は弟のモデースト、コーリャ、最後に女性家庭教師ソフィーヤ・エルショーヴァと同行した。

[3]　肯定的な評価を示すために彼の教え子の成績を評価する際.「+」マークがモデースト・チャイコフスキーによって使われた。

1876年と言えばコーリャはまだ８歳だが、もう手紙を書くことができ、読むことができたことになる。コーリャ少年に対する愛情の表現も情熱的である。1877年の手紙を見よう。公開されている手紙の２通目“Letter 646”である。離婚騒動で交流が減った年の11月である。コーリャに関係のある前半のみを引用する。[16]

Venice, 24/12 November 1877

16　http://en.tchaikovsky-research.net/pages/Letter_646　2016年６月１日閲覧

Dear Kolya! I was very happy to receive your letter, although sad that it was so short. Another time write a little more to me, about what you are doing, where you are walking, and what you are learning? （以下略）

1877年11月12日／24日 ベニス

親愛なるコーリャ。私は（君の手紙が）とても短くて悲しかったけれど、返事をもらってとても嬉しい。　改めて私に、何をしてるか、どこを歩いているか、そして何を習っているか、もう少し書いてくれませんか。

コーリャからの手紙が短くてがっかりして、今度は長めに書いてほしいと頼むところに、チャイコフスキーの気持ちが表れている。そして写真でしか知ることのなかったコーリャの実像がチャイコフスキーの手紙から窺われることは興味深い。

“Letter 836”も喜びを隠さない。こう書くことによってコーリャの書く気を引き出しているのだろうか。チャイコフスキーの率直な愛情表現、あるいは繊細な気配りが窺われる。長くなるので、心情面が表されている部分のみを引用する。以下同様である。[17]

Brailov, 22 May

I received your letter yesterday and was so happy that I leapt several times!
I really miss Modest and you, and often think about you.（中略）

Your friend Pyotr
I kiss you many times, my dear little fellow.

1878年５月22日　Blailoy

私は昨日あなたの手紙を受け取って何回も飛び上がるほど嬉しかったです。
私はモデーストと君に会えなくて寂しく、良く君たちのことを思っている。（中略）
あなたに何回もキス、我が愛しの仲間。

“Letter4372”も同様、省略して載せる[18]。コーリャはもう少年ではなく23歳前後の青年となっている。

17　http://en.tchaikovsky-research.net/pages/Letter_836　2016年６月１日閲覧
18　http://en.tchaikovsky-research.net/pages/Letter_4372　2016年６月１日閲覧

4 May/22 April 1891　New York

My dear Nikolasya!

I've just received your letter [1]. It's not possible to explain how glad I am to receive letters, especially those as extensive as yours!!! Thank you!!!（後略）

[1] Letter from Nikolay Konradi to the composer, 7/19 April 1891

1891年４月22日／５月４日　ニューヨーク

親愛なるNikolasha

私はちょうど君の手紙を受け取った。手紙を受け取った喜びを私は説明できない、特に君と同じくらいの大きな喜びを！ありがとう！

[1] 1891年４月７日／19日、ニコライ・コンラーディから作曲家への手紙

この手紙も“Letter485”と同様、コーリャからの手紙の返信であり、コーリャの手紙いつ届いたか記録が註にある。この手紙も喜びを表している。

“Letter4549”は短い手紙なので全部引用する。[19]

14 November 1891

My dear friend Kolya

Thank you, thank you, thank you for the loan, which came in very handy. If my thanks are overdue, this is because of the usual tribulations that accompany the 1891 staging of an opera［1］. I will thank you properly in Petersburg at the end of the month［2］.

I embrace you.

P. Tchaikovsky

[1] Tchaikovsky's opera The Queen of Spades was staged for the first time at the Bolshoi Theatre in Moscow on 4/16 November 1891

[2] Tchaikovsky left Maydanovo for Saint Petersburg on 24 November/6 December

私の親愛なる友人コーリャ、あなたに感謝し あなたに感謝する お金を貸してくれたことをを感謝する。それは非常にとても役に立った。もし私の感謝が足りないならば、これは、オペラ[1]の上演にまつわる苦難のためである。私は月末[2]にピーターズバーグであな

19　http://en.tchaikovsky-research.net/pages/Letter_4549 2016年６月１日閲覧

たに気持ちを込めて感謝する。私はあなたを抱擁する。

[1] 1891年11月４／16日にモスクワのBolshoi劇場でチャイコフスキーのオペラ、スペードの女王が初めて上演された。

[2] チャイコフスキーは11月24日／1891年12月６日にMaydanovoをセント・ピーターズバーグに残していた。

この手紙からはチャイコフスキーがコーリャに借金していた意外な事実がわかる。1890年、支援者メック夫人が支援を突然中止したのでチャイコフスキーは資金に困っていたのだろうか。コーリャは資金を融通できるくらいの遺産を父から受け継いたのだろうか。

最後の手紙は“Letter4948”[20]で、６月。チャイコフスキーはこの年の11月に亡くなるので死ぬ５ヶ月前の手紙である。コーリャからの手紙の返事の形はとらず、チャイコフスキーの方からの手紙である。ケンブリッジ大学で表彰され、少し体調を崩し、帰りのルートの報告の後、最後にモデーストとチャイコフスキーとコーリャの関係性を窺わせる文章がある。その時コーリャは25歳前後になる。

Paris　15/3 June 1893

Dear friend　Kolya!

I arrived in Paris yesterday almost directly from Cambridge.

（中略）

I don't know where to write to Modya. Write to him about me.

I hug you all tightly.

P. Tchaikovsky

1893年6月3/15日

親愛なる友人コーリャ！

私は昨日Cambridge.からパリ近くに直接到着した。

（中略）

私は、どこでモデーストに手紙を書くかを知らない。私について彼に手紙を書きなさい。私はあなたをすべてしっかり抱きしめる。

チャイコフスキー

20　http://en.tchaikovsky-research.net/pages/Letter_4948　2016年６月１日閲覧

この手紙ではチャイコフスキーはコーリャに対しては、変わらない愛情の表現と、仲裁の働きかけを示唆する内容の手紙であることを示しているように思われる。最初の手紙からここまで見ると、コーリャ少年の成長が見て取れる。憐憫や愛情、あるいは勤勉の勧めの対象から借金を申し込むことができる金銭的パートナーに成長し、弟と諍いを起こす、これはある意味主張をもつ青年に成長した様子が間接的に読み取れる。また、チャイコフスキーとコーリャ少年を結びつける重要な役割を果たしたモデーストについても同サイトではかなりの紙数をさいている。その中でコーリャ少年にまつわる回想が、「教育者」の項にある、以下に引用する。長いので後半部分を引用する。[21]

The Educator

Remarkably, in his capacity as a pedagogue Modest even seems to have surpassed Pyotr. The composer, for the most part, felt annoyance at his educational duties, and at the earliest opportunity, supplied by the beneficent Mrs von Meck, he resigned his professorship at the Moscow Conservatory; moreover, his relationship with individual pupils was often stormy and dramatic. Modest, on the other hand, eminently succeeded in the rare and difficult enterprise of surdo-pedagogics, the education of a deaf mute pupil, Nikolay ("Kolya") Konradi, whom he taught several languages and a vast amount of knowledge, and with whom he developed a steady companionship that lasted for seventeen years. This not only brought about the eagerly desired admiration of his elder brother, but must have impressed the authorities in the field, for in 1885 Modest was offered the directorship of a special school for the deaf and mute which he declined. None of this, however, sufficed to make Modest feel satisfied：in an unpublished letter of 27 August/8 September 1882 he lamented his failure as a pedagogue [11].

「教育者」 モデーストは教師としての能力は著しくピョートルさえ超えていたようである。 作曲者は、殆どの部分の教育的な責務にいらだちを感じて、早い機会にメック夫人の支えを受けて、モスクワの音楽学校の教授の職を辞任した。さらに、個々の生徒との彼の関係は、しばしば嵐であり、波乱もあった。

モデーストは一方で稀有で困難な聾唖教育の事業の顕著な成功をおさめた、コーリャ・コンラーディという聾唖者の教育、いくつかの言語と膨大な知識および17年間発展した友情をしっかりと継続した。これは、彼の兄の熱心な切望と賞賛をもたらしただけでなく、モデーストが1885年、彼が前に辞退した聾唖の専門学校の役員職が提供されたため、教育界において感銘を与えたに違いない。

しかし、これのどれも、モデーストの気持ちを満たさせられるために十分ではなかった、

21　http://en.tchaikovsky-research.net/pages/Modest_Tchaikovsky　The Educatorの項2016年６月１日閲覧

8月27日／1882年９月８日の未発表の手紙において、彼は教師として自分の失敗を嘆き悲しんだ[11].

[11]モデーストからチャイコフスキーへの手紙　1882年8月27日/9月8日クリン博物館

ここで、モデーストは失敗を嘆いている。いろんな意味にとれるが、彼は成功例のモデルを見ているのだろう。コーリャ少年はどう感じていたのだろうか。一緒に旅行するなど交流は出来たけれど、お互いに理想とする形にずれが有ったのかもしれない。

2.5　帝政ロシアの聾唖教育

ここまではまで写真、文献、手紙によるコーリャの資料を取り上げて、彼の人間像の再現を試みた。まだ調査が及ばない部分も少なくないが、チャイコフスキーと交流があったことは事実であり、写真だけでなく手紙での交流が残っていることは調査の助けになった。研究サイト“Tchaikovsky Research”に深謝する次第である。

コーリャは８歳の時にモデーストが家庭教師となる、モデーストはその家庭教師を引き受けるに当たり、１年間リヨンで“sonic　speech”をグゲントブレルから学ぶといういささか付け焼き刃的な行動をとるが、当時はそういう教育制度も曖昧だったのだろうか。ここで帝政ロシアの聾唖教育がどのようなものだったのか全体像を俯瞰してみたい。以下引用するがマリア・フョードロブナ皇太后は同名が二人いてそれぞれ時期が違うことに留意されたい。しかも2人とも聾唖教育に関わっている。

帝政ロシアのろうあ教育史をひも解いてみるに、大きなうねりは2度あった。１度目は19世紀初頭のマリア・フョードロブナ皇太后Мария Фёдоровна（1759～1828）によるものであり、本稿は彼女の活動を事実上のろうあ教育の開始とみる。そして2度目は1894年夫アレクサンドルⅢ世の死去を受けて同じく皇太后となった同名マリア・フョードロヴナ皇太后（1847～1927）によるものだ。それは20世紀初頭のことであった。（本稿では両者を区別するため、後者を示すときは皇太后の文字に傍点を記した）

「1806年、マリア・フョードロブナ皇太后によりパヴロフスクに慈善活動として盲ろうあ児施設が創立された。1796年にパーヴェルⅠ世の勅令によって設立された「マリア皇后施設管理部　Ведомство учреждений императрицы Марии（後にマリア皇太后施設管理部）」がその直接の管理に当たっている。この管理部の下には、盲ろうあ施設や貴族女学校、孤児院、養老院、そして若干の病院があった。

ソ連時代にこの盲ろうあ児施設で学んだあるろうあ者は、マリア・フョードロブナ皇太后について、感謝の念を持って次のように述べている。「彼女（マリア・フョードロブナ皇太后）は非常に慈悲深い人だった。彼女は最初、盲学校を設立した。その後、パヴロフスクの公園を散歩しているとき、召使いの１人がある男の子と手話で会話しているのを目撃した。彼女は近寄り、その男の子がろうあであり、兄弟がおり、その兄弟もろうあであ

ることを知った。マリア・フョードロブナは自身の日記にその日は朝まで眠ることができず、ロシアにどれほどのろうあ者がいるのかと、考えていた、と記している。」

彼女により設立されたこの施設は1810年サンクト・ペテルブルグに移り、生徒数も９名から23名、1812年には28名、翌年には49名と拡大の一途を辿った。（後略）（白村2012：76-77）

コーリャが生まれたのは1868年、半世紀以上前に帝政ロシアでは聾教育が始まっていた。欧州はもっと早く1760年スコットランドのエンジバラでトーマス・ブレードウッドが、1770年（1760年ともいわれている）フランスのパリではアベ、ド・レペが、1778年ドイツのライプチヒでザムエル・ハイニッケが聾学校を開設している。（エリクソン、中野、松藤2003：128）その中でコーリャはモデーストの家庭教師による教育を受けたのは興味深い。コーリャはモクスワから南西へ300キロぐらい離れたグランキノで生まれ育っているからパヴロフスクとなると遠すぎる。北欧と変わらない距離になる。そうなると家庭教師もしくはフランスなど西欧で教育を受けた方が現実的な面も出てくる。帝政ロシアに視線を戻そう。

19世紀末の２つめの大きなうねりはマリア・フョードロブナ皇太后がろうあ教育に取り組んだことでもたらされたものだった。具体的な形になって現れたのは1898年のことであり、彼女はマリア皇太后施設管理部の下に、ろうあ者支援マリア慈善基金Попечительство Государыни Императрицы Марии Федоровны о глухонемы（以下マリア基金）を設立し、ろうあ教育の支援を開始している。（白村2012：77）

1898年、チャイコフスキーはすでに亡くなっている、コーリャは30歳。第２のうねりの恩恵を受けることはなかったろう。第一次世界大戦（1914～1918）前には41の学習施設があったが、1917年の革命により従来のシステムは否定され、先人たちが創建したろうあ教育制度が崩壊し始めた（白村2013）。そのことを思うとコーリャは家庭教師という形ながら聾唖教育を受けられる権利があっただけよかったのかもしれない。

３．おわりに

コーリャを巡るチャイコフスキー、モデースト兄弟、帝政ロシアや欧州の聾唖教育の大きな流れを眺めるとやはりチャイコフスキーとコーリャの間のつながりが浮かび上がってくる。チャイコフスキーはコーリャとともに写真に収まり、手紙も交わし、それは死の年まで続いた。音のある世界では全く接点がない二人であるのに交流が長く続いていたことは不思議と言うほかはない。コーリャの前にチャイコフスキーは全